

共立国際交流奨学財団主催  
「国際ボランティア支援基金」  
助成金活動報告書



国土館大学 21世紀アジア学部 2年 高本 仁  
桐蔭横浜大学 法学部 2年 松原 淳史

# 目次

企画報告書

実施した企画の効果と、今後の展開

企画実施者の感想

企画参加者の感想

## 企画報告書

企画名：「学びたい子供たちに送る、私たちだけの授業」

期 間：2019年8月7日～8月15日（9日間）

場 所：カンボジア プノンペン 「ひろしまハウス」

Onalom Pagoda, ST.13, Sangkat Chey Comneas, Khan Doun Penh Phom Panh  
Cambodia.

企画内容：カンボジアにて初等教育支援活動

参加者：ひろしまハウス児童生徒 約50名

ひろしまハウス職員 5名

高本 仁（国土館大学 2年）

松原 淳史（桐蔭横浜大学 2年）

スケジュール：8/8：アジアの新しい風さんとワークショップ，8/9：レクリエーション

8/12：うどんの手打ち体験，8/13：茶道体験，8/14：ひろしまハウス  
お手伝い

<予算及び決算報告>

費目	予算	決算	内訳
手打ちうどん体験	7,000円	7,000円	うどん（50人分）
	6,000円	6,000円	調理道具
	5,000円	5,000円	調味料
茶道体験	5,000円	4,500円	お茶（50人分）
	5,000円	6,000円	お菓子
	5,000円	4,500円	茶道道具（6セット）
レクリエーション	1,500円	1,000円	けん玉
	1,000円	1,000円	だるま落とし
	1,000円	1,000円	竹とんぼ
	1,500円	2,000円	お菓子
渡航費	80,000円	80,000円	
宿泊費	8,000円	8,000円	
通信機器	25,000円	25,000円	
合計	150,000円	150,000円	

## <実施した企画の効果と、今後の展開>

### <効果>

企画終了後、実際に企画に参加した子供達に今回の企画の感想を聞いてみたところ、答えてくれた子供達全員の第一声が「楽しかった！」だった。次に、今回の活動の中でどれが一番印象的だったかを問うと、うどん作りや茶道体験など、意見は様々であった。つまり、定性的にみると企画自体は満足してくれたようだ。そして、最後に子供たちが「また来てほしい！」「次はいつ来るの？」と私たちに聞きに来てくれた時は、今回の活動が子供たちにとって必要だと感じている証拠なのだと思う。

### <反省>

しかしながら、この活動の効果を定量的に図ることができなかったのが反省点としてあげられる。そこで次回は、その反省点を踏まえて小さなアンケートや具体的な数字を残せるようにしたい。ひろしまハウスには幅広い年齢層の子供がいただけに、どの年代の子は理解できたのかを具体的な数字で確認したいと感じた。

### <私たち自身の今後の展開>

上記の通り、子供たちは本企画を全力で楽しみ、最終的には私たちが必要だと感じてくれていた。だが、私たち自身は本企画で膨大な数の改善点があったと感じている。理由は、他の支援団体の企画と一緒に参加させてもらったことで企画の洗練度の差を痛感したからである。従って、自分たちは大中小規模の様々な支援団体から支援方法について学び、その方法を深く考えてから、どのように現地の方と接していくかを考えたい。

### <現地の今後の展開>

現地の子供たちは、私たち以外にも多くの団体と様々な活動を共にしている。よって、断続的に学ぶ機会が得られることを確認することができた。加えて、彼らが今回の活動を通して知ることができた日本の食文化や歴史をこれからの勉強のモチベーションにすることができている。また、本企画とは別に、数百人程度の規模で運動会をした。その運動会の参加人数の多さと企画内容の盛り上がり、私はその運動会に衝撃を受けた。理由は単純明白で参加人数が増えたからだと考えている。この企画のように多くの人を巻き込んで今回の企画よりも影響を与えることのできる企画作りをこれからは意識していきたい。



## <企画実施者の感想>

国士館大学 21世紀アジア学部 二年 高本 仁

今回の「学びたい子供たちに送る、私たちだけの授業」は、私にとって初めて企画の全体像を計画したプロジェクトだった。よって、事前に現地訪問先までの行き方や、活動内容、宿泊先などを私たち自身が決めなければならなかった。いままでの企画に参加する立場なら、指定された場所に行くだけで宿泊先や食事が提供されるため、すべてを自分が決めるといふことに対してとてもやりがいを感じた。しかし、正直な感想は個人で活動するには限界があると感じた。理由は、今回複数の支援団体と活動を共にさせていただいた際に企画においてできることも、継続性もすべてにおいて個人での企画とはレベルが違ふと感じたからだ。従って、私はより影響を与えることのできる団体に所属またはそのような団体を立ち上げたいと感じた。

## <活動内容>

### ① うどん手打ち体験

まず、パワーポイントを使ってうどんの作り方を子供たちと共有した。作業工程が多く、時間も多くなかったため、材料の分量はあらかじめ量っておいたことで調理はとてもスムーズに進行できた。子供たちも真剣に説明聞いてくれたので、きっと美味しく、綺麗なうどんができると予想していた。しかし、なかなか生地が一つのまとまりにならなかったため水を足す班が多かった。従って、いくつかの班は水気の多い生地になって後半はやりづらそうな印象だった。だが、苦労して作った初めてのうどんに子供たちは興味津々で、より一層日本料理に興味・関心を持つようになった。



### ② レクリエーション

子供たちとけん玉、だるま落とし、竹とんぼ、こま回しをした。四つのブースを作り、10分で各班がローテーションする方法で進行した。そんな活動中最も盛り上がったのは、だるま落としであった。本来、だるま落としは一人だけで遊ぶものなのに、班全員が釘付けになっていた。なぜそんなに楽しそうなのかを聞くと、子供たちは「成功した時に喜ぶのが好きだから」と言う。そこで初めて、この孤児院に通う子供たちは自分に対しても、他者に対しても優しくできる子供だと知ることができた。



## <企画参加者の感想>

桐蔭横浜大学 法学部 二年 松原 淳史

私は、大学では法に関することを中心に学んでいる。従って、今回の企画のように海外の子供たちに教育することや日本文化を詳しく学んではいない。しかしながら、カンボジアの現状や教育に関しての情報を聞くと自分にもできることがあるのではないかと感じた。故に、私は今回の企画参加を決意したのである。今回の企画で印象に残ったのは、子供たちの元気いっぱいな姿である。理由は、孤児院に行く前日までは子供たちとの接し方に不安を抱いていたが、孤児院に入った瞬間に子供たちの方から積極的に話しかけてくれたことがあったからだ。その後は、活動外の時間にサッカーをしたりダンスをしたりと子供たちのコミュニケーション能力の高さに終始驚かされていた。その結果、教えられることは少なかったかもしれないが、子供たちと一番仲良くなれた自信がある。

## <活動内容>

### ③ 茶道体験

この活動では日本の「茶道」という文化の存在を子供たちに知ってほしかった。従って、茶道について深く教えることはせずに、少しでも親しみやすい授業をするよう試みた。そんな活動中に子供たちが一番興味を持ってくれたのは落雁だった。当然、子供たちは落雁を見るのは初めてであったため、目を輝かせながら、「これは食べられるのか？」と私に質問してきた。私はその質問に笑顔で「食べられるよ」というと、子供たちはお茶よりもお気に入りの落雁を探すのに必死になっていた。



### ④ フライングディスク

今回、国際ボランティア団体チーム「アジアの風」さんの、企画に参加することになった。この企画ではまず、自分たちで作った色鮮やかな和紙を紙皿に飾り付け、マイディスクを制作するところからスタートした。次にそのディスクを、実際に飛ばしてゴールに何回入るのかを競うゲームを二チームに分かれて対戦した。その際、得点が入れば「ナイスゴール」失敗しても「がんばれ！」と励ましあっていたのが印象的だった。

